

3. 天竜川上流域の災害履歴と教訓・伝承事例

本検討会の検討過程では、文献調査、ヒアリング調査、現地調査を通じて、天竜川上流域で過去に起こった災害の実績や、流域内に散在している災害教訓・伝承の調査を行った。天竜川上流域の既往災害については主な災害について詳細調査を行い、流域に存在する災害に基づく教訓・伝承については、伝承の内容を分類し、とりまとめを行った。

また既往災害及び災害教訓・伝承を地図上に整理し、地図上の主要災害箇所から特に特徴的な災害履歴の残る9地域を設定し整理を行った。

3-1 天竜川上流域に伝わる災害教訓・伝承

(1) 災害教訓・伝承の概要

天竜川上流域各地での災害教訓伝承活動の参考となるよう、特徴的な既往災害や教訓・伝承の蓄積のある主要地域9箇所の概要、各伝承内容の概要を以下に示す。整理にあたっては、伝承の内容を以下に分類し、該当する分類ごとに主な教訓・伝承事例の概要を記載した。

表 1 整理した災害教訓・伝承の分類

分類	説明
○治水・土木	・堤防を築くなど生活や産業のために水を治めること全般に関するもの（河川改修碑を含む）
○災害の事実・災害体験・得られた教訓	・災害時の状況や災害の被災体験に言及したもの。特に「教訓」は、被災体験より後世への教えを抽出したもの（災害記念碑を含む）
○信仰	・天変地異や災害を由来とする信仰、自然に対する畏怖、崇拝に関するもの
○ことわざ	・経験を通して得た生活の知恵を簡潔な言葉にまとめたもの
○文芸・民謡・詩	・和歌、短歌、川柳などの文芸作品や、地域に根ざして民衆に歌い継がれてきたもの
○民話・伝説・昔話	・自然や文化、慣習、行事などの由来を説明するもの。各土地に根をおろし、真実と受け止められ、地域に実在するモノや特定の事物に結びつけられて語られるもの ・話の内容より、①洪水 ②土砂（山崩れ/土石流）③地震 ④その他天変地異（暴風・風雨・火災・雪害等）に関連するものに細分化される。

なお、詳細な災害教訓・伝承の一覧を参考資料-1、また今回の調査において収集した文献リストを参考資料-2に掲載した。

(2) 地域別の災害事象及び教訓・伝承の分布

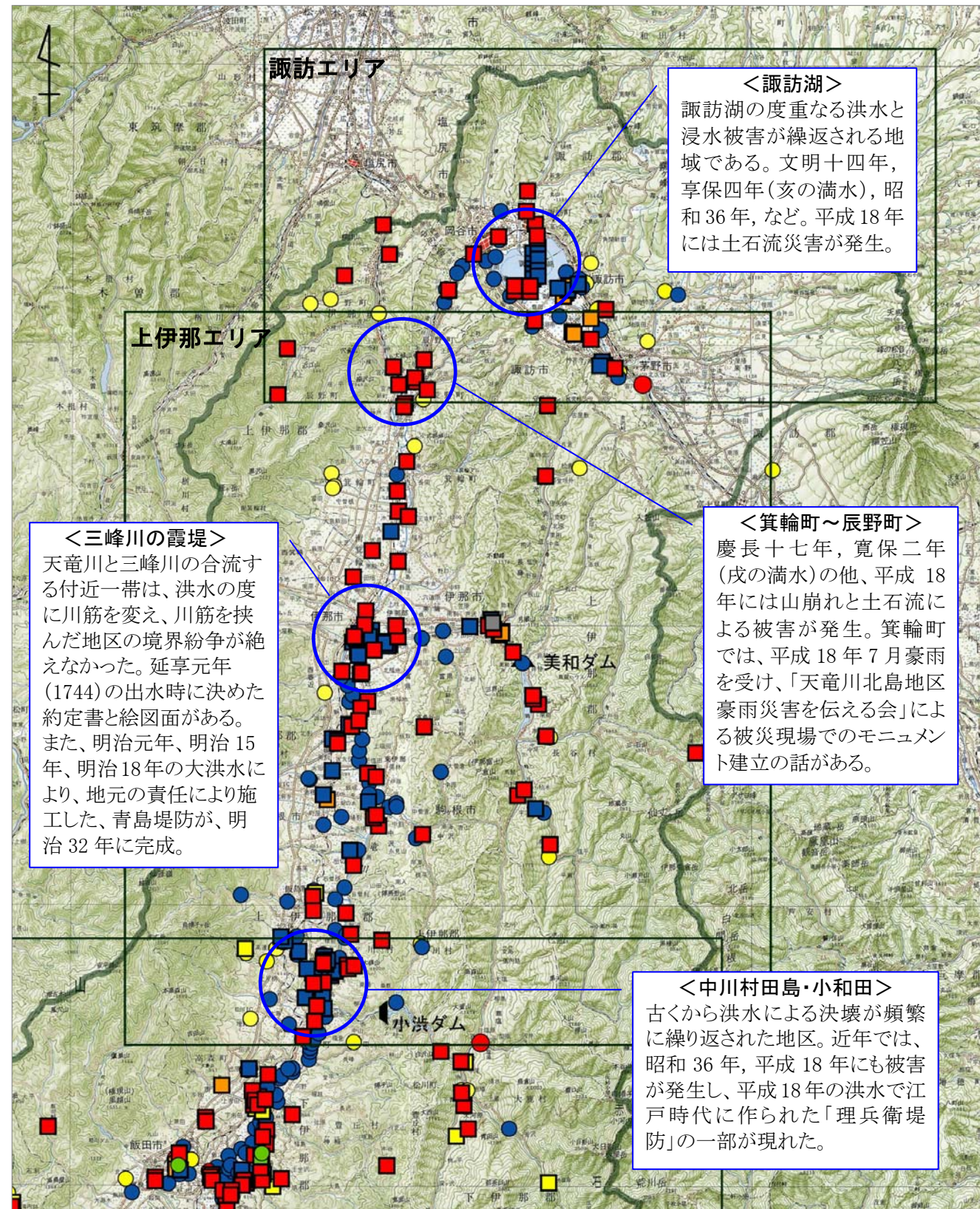


図2 災害事象及び教訓・伝承の分布図(諏訪～上伊那)

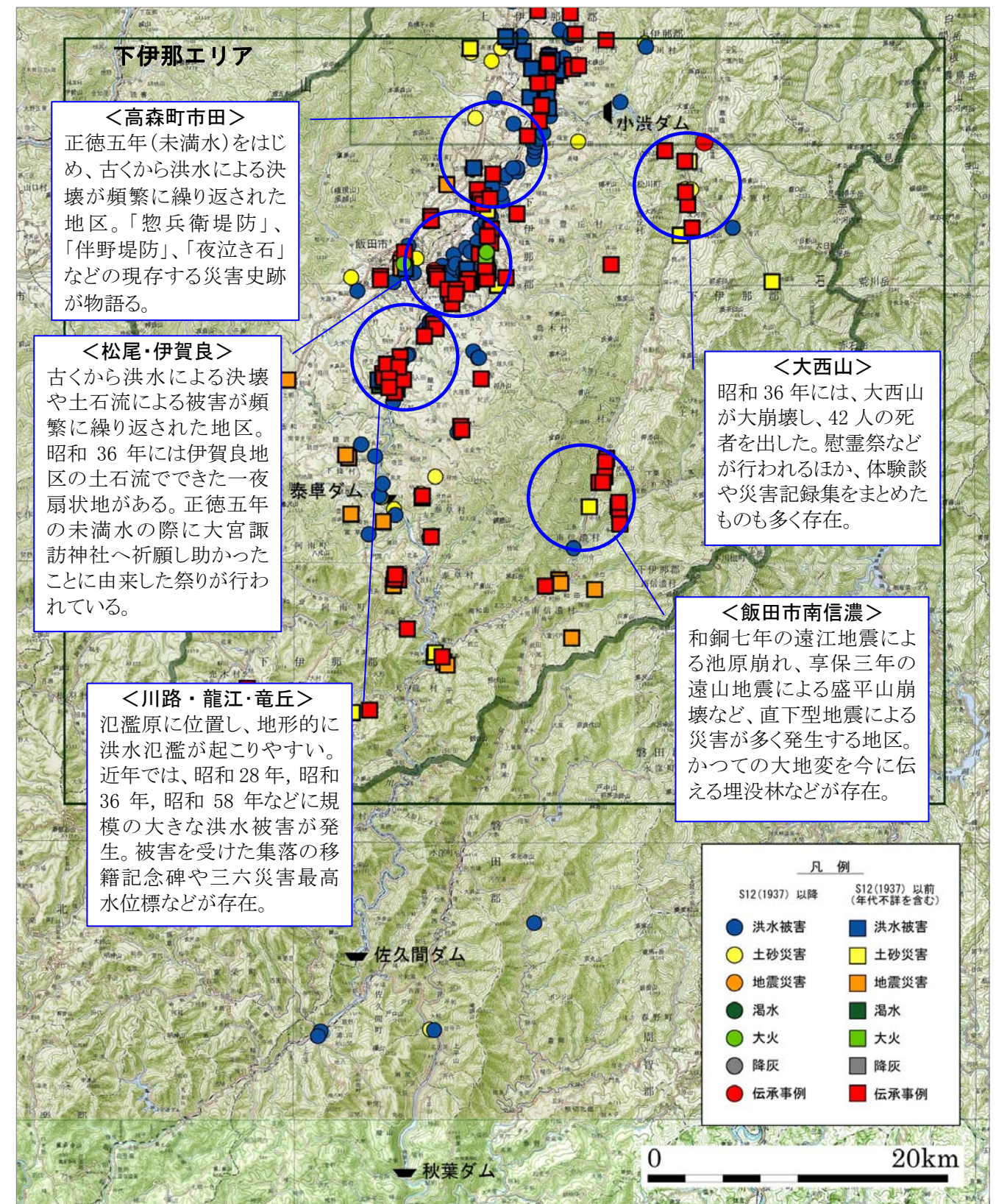


図3 災害事象及び教訓・伝承の分布図(下伊那～以南)

表 2 地域別詳細情報の整理(1/2)

	地域	災害履歴の有無						教訓伝承内容			現地	訴求対象への効果等	その他 検討を進める上で特記する事項
		36 災以前	36 災	58 災	H18 災	地震	その他	洪水	土砂	その他	史跡・施設等		
1	諏訪湖の周辺地域	諏訪湖に注ぐ流入河川や諏訪の大社に纏わる多くの貴重な伝承や地震に記録が多く残る。	36災害で最も洪水被害を受けた地域であり、記録もある。	大規模な災害の記録が多く残る。	岡谷市や辰野を中心に土石流被害が大きく被害も甚大であった。	遠山地震 東南海	浸水被害への対応や釜口水門の利活用の促進と検討。	・常官寺のお話し ・桑原城の攻防 ・坂室の赤石とおこり石 ・福次荒れ ・聞かずの神様 ・諏訪大社下社の七不思議	・しっぽのない赤いへび ・流された四王 ・鮎澤系図	諏訪大社の祭	諏訪湖	記録や史実 地域の歴史性 組織 地物 次世代の継承者 話題性	・釜口水門の変遷 ・東南海地震による地盤災害の継承 ・度重なる洪水と浸水被害 ・水利権争い
2	箕輪町～辰野町	箕輪町～辰野町では天竜川に纏わる多くの貴重な伝承や寺社、土石流の伝承が多い。	大規模な災害の記録は残っていない	大規模な災害の記録は残っていない	辰野町では小野中村や山口地区、下雨沢で水害や土砂災害が多発。箕輪町の北島堤防も決壊	特記なし	特記なし	・一本松伝説 ・辰野縁起 ・八王子神社の伝説	・蛇抜け ・蛇石 ・洞ヶ入鐘楼堂のはなし	上横川神社のお神楽	蛇石 上横川神社	記録や史実 地域の歴史性 人物 地物 話題性	・箕輪町では、「天竜川北島地区豪雨災害を伝える会」による被災現場でのモニュメント建立などの取り組み事例があり)
3	伊那市三峰川の霞堤	天竜川や、三峰川に纏わる多くの貴重な伝承や地震に記録が大変多く残る。	36災害で最も洪水被害を受けた地域であり、記録もある。	洪水被害を受けた地域であり、記録もある	天竜川水位は36災害以降では最大である。伊那市で河川施設に複数被害あり。	高遠地震	地域の団体による積極的な三峰川へのアプローチや保全活動の取り組み	・経塚 ・般若島 ・境界紛争と見通し桜 ・草餅地蔵 ・米高岩 ・入野谷騒動 ・黒河内長者屋敷	・おや子石 ・犬石	三峰川未来会議の積極的な取り組み	青島堤防 高遠弁財天	記録や史実 地域の歴史性 人物 組織 地物 次世代の継承者 話題性	・霞堤(伊那市美篤) ・「北風が吹くと大水が出る」(伊那市東春近)
4	駒ヶ根市飯島町、中川村田島・小和田	中川村や駒ヶ根市を中心として天竜川に纏わる多くの貴重な伝承や地震に記録が多い。	36災害で最も洪水被害を受けた地域であり、記録も豊富である	58災害で最も洪水被害を受けた地域である	天竜川水位は36災害以降では最大である。飯島町、中川村で河川施設に被害あり。	濃尾地震	天の中橋上流側の理兵衛堤防の出現	・小鍛冶の矢文 ・石神の松 ・浮島の伝説 ・鬼の島鬼の的 ・石神の松 ・戸隠山 ・隅の木 ・仏石	落石	・天女鱒霊神	理兵衛堤防 小和田の霞堤 石神の松	記録や史実 地域の歴史性 人物 組織 地物 次世代の継承者 話題性	・古くから洪水による決壊が頻繁に繰り返された箇所 ・平成 18 年 7 月豪雨の際に、小和田地区の浸水等の被害 ・「理兵衛堤防」とそれにまつわる言い伝え ・田切地形に由来する地名「片桐」

表 2 地域別詳細情報の整理(2/2)

	地域	災害履歴の有無						教訓伝承内容			現地	訴求対象への効果等	その他 検討を進める上で特記する事項
		36 災以前	36 災	58 災	H18 災	地震	その他	洪水	土砂	その他	史跡・施設等		
5	大鹿村 大西山	大鹿村では災害に纏わる多くの貴重な伝承や地震に記録がある。	大規模な災害の記録が多く残る。未だに災害の痕跡が残る。	洪水被害を受けた地域であり、記録もある	大規模災害の記録は少なかった。	特記なし	大西山での慰霊祭	・悪い滝の主を退治した勇士 ・横山七ヶ寺の流出	・観音なぎと駒石 ・斜面を転がってきた石	36 災の体験談	大西公園	記録や史実 地域の歴史性 人物 地物 話題性	・36 年災による大崩壊
6	高森町市田、豊丘村	高森周辺では天竜川に纏わる多くの貴重な伝承や地震に記録が多い。	36 災害で最も洪水被害を受けた地域であり、記録も豊富である。	58 災害で最も洪水被害を受けた地域である。	天竜川水位は36 災害以降では最大である。高森町、豊丘村で河川災害の被害あり。	宝永地震 安政東海	特記なし	・前亡後死三界万霊碑 ・地藏沢 ・明神様の瀬分け鎌	出砂原 夜鳴き石	大蛇が城	惣兵衛堤防	記録や史実 組織 地物 話題性	・古くから洪水による決壊が頻繁に繰り返された箇所 ・「惣兵衛堤防」、「伴野堤防」とそれにまつわる言い伝え ・「亀甲石」、「夜泣き石」、「量水標」などの史跡 ・災害に見舞われやすい地区であったことを示す地名「出砂原」
7	飯田市、松尾・伊賀良・上久堅、清内路・阿智	飯田市周辺では、天竜川に纏わる多くの貴重な伝承や地震に記録が多い。	36 災害で最も洪水被害を受けた地域であり、記録も豊富である。	58 災害で最も洪水被害を受けた地域である。	天竜川水位は36 災害以降では最大である。森町、豊丘村で河川施設に被害あり。	天正地震 宝永地震 安政東海	特記なし	・うしろ向きになった弁天様 ・地藏岩 ・池が洞の主	北原の土石流	大宮諏訪神社の式年祭	松尾弁天殿 宮神社 川原弁天 伴野堤防	記録や史実 地域の歴史性 人物 組織 地物 次世代の継承者 話題性	・古くから洪水による決壊や土石流による被害が頻繁に繰り返された箇所 ・昭和 36 年に伊賀良地区の土石流でできた一夜扇状地がある ・野底川など天竜川の支川でも大規模な被害がある ・飯田市街地での土砂災害の記録
8	川路・龍江・竜丘・下條	川路～竜江では天竜川に纏わる多くの貴重な伝承や地震に記録が多い。	36 災害で最も洪水被害を受けた地域であり、記録も豊富である。	58 災害で最も洪水被害を受けた地域である。	天竜川水位は36 災害以降では最大である。川路、下久堅での河川災害の被害あり。	慶長元年 寛永九年 寛文二年 寛文三年 宝永地震 遠山地震 安政東海	特記なし	・烏帽子岩 ・貝鞍が池の主と人柱かわりの墓石 ・尾科文吾 ・尾張対馬神社の祇園	特記なし	尾張津島神社の祇園祭	かわらんべ	記録や史実 地域の歴史性 人物 組織 地物 次世代の継承者 話題性	・天竜峡上流の氾濫原に位置し、地形的に洪水氾濫が起りやすい。 ・天竜川総合学習館かわらんべを利用した施設の活用
9	旧南信濃 旧上村	遠山川流域では天竜川に纏わる多くの貴重な伝承や地震に記録が多い。	36 災害で最も洪水被害を受けた地域であり、記録も豊富である	58 災害で最も洪水被害を受けた地域である	大規模な災害の記録は残っていない	遠見地震 遠江地震 遠山地震 関東地震	特記なし	・池城の明神様 ・中郷の流れ宮 ・夜川瀬(遠山地震での隆起)	喧嘩岩	・霜月祭り ・水神、山ノ神 ・かけ踊り	池口の埋没林	記録や史実 地域の歴史性 地物 話題性	・享保三年の盛平山の崩壊など歴史災害の記録 ・遠山郷での天明飢饉に伴う悲話や享保地震史料など ・36 年災他近年豪雨でも橋が落ちるなどの被害あり ・遠江地震による池原崩れ

表 3 伝承内容の概要(1/7)

伝承内容の分類	事例数※ (n=199)	伝承内容の概要	主な事例(番号は参考資料-2に対応)
○治水・土木	27	<p>■災害に挑む人々の姿を伝えるもの</p> <p>・先人の偉業を讃えた石碑や土木遺構、古くからの治水技術の痕跡など、不屈の精神で災害に挑んできた先人の知恵や技術の継承を今に伝えるもの</p>	<p>○天龍川改修記念碑(伊那市東春近田原)^{ひがしはるちかたわら}【No.39】 昭和22年6月天龍川が直轄編入され、最初に着手されたところに建てられた記念碑である。</p> <p>○太田切川の川除林(駒ヶ根市下平)^{しもだいら}【No.69】 元禄四年(1691)の五月の霖雨、六月には天龍川に洪水があり、伊那谷に大きな被害がでた。この年、太田切川と天龍川との合流点に二十数歩にわたって植林がなされた。長さ七百間・幅百間は戦後まで残存したが、現在は伐木開墾されて水田地帯に変わり、県立西駒郷ほかの施設中にわずかに松林の面影を留めている。</p> <p>○理兵衛堤防(中川村片桐田島)^{かたぎりたしま}【No.77】 田島村の名主松村理兵衛忠欣^{ただよし}が、度重なる天龍川の水害から田島を護るために私財をなげうち、尾張から石工を呼んで堤防工事を始めた。工事中に何度も水害に見舞われ、至難を極めたが、理兵衛の孫の三代に渡り58年間と3万両もの莫大な費用をかけて堤防が完成した。平成18年7月豪雨の際、洪水の跡に理兵衛堤防の石積が発見されている。</p>
	1	<p>■災害に対する知恵を忘れてしまう人々の姿を伝えるもの</p> <p>・過去の経験から培った知恵が継承されなかった故に、時を経て再度災害に見舞われたエピソードを示すもの</p>	<p>○伊久間水除土手(喬木村伊久間)^{いくま}【No.103】 長さ1,700m、高さ1m余りの掘割で、伊久間の人たちが集団で中世末期頃からつくりはじめたという。人家の多いあたりには水除土手は二重に造られている。しかし災害が遠のくとその効得を忘れがちになり、掘割を埋めたり物を置いたり、いざらいを怠った。その結果、大きな雹が降った昭和2年6月には、麦がらなどが掘割の中に入っていたのでたちまちに水が溢れ出し、伊久間は災害に見舞われた。</p>



天龍川改修記念碑【No.39】



理兵衛堤防【No.77】

※事例数：参考資料-2 現存する教訓・伝承事例一覧に整理した事例を分類ごとに計上

表 3 伝承内容の概要(2/7)

伝承内容の分類	事例数※ (n=199)	伝承内容の概要	主な事例(番号は参考資料-2に対応)
○災害の事実・災害体験・得られた教訓	40	<p>■災害の事実および災害体験を証明・記録し、後世に伝えるもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・災害の事実を記す文書として存在するもの ・災害からの復興などを記念し建立される碑や、災害の大きさを物語る石など、災害現場付近に、形として存在するもの ・災害体験談や、災害による集団移住など地域社会に与えた影響に関するエピソードを示すもの 	<p>○移住した田原村新田の人々(伊那市東^{ひがしはるち}春近^{かたわら}田原)【No.38】 慶応四年(1868)五月七日から大沢川の押し出す大水と天竜川の増水が重なり、田原村新田の全戸に満水して家屋 21 戸・水田 20 町歩余が流失した。このとき、避難した人々のうち 110 戸が今でも薬師庵の裏山に住み、山組部落と称して石垣づくりの住宅を構えている。</p> <p>○松尾幸久氏の 36 災害体験談(大鹿村^{かしお}鹿塩)【No.108】 27 日、鹿塩地区で 4 軒流出。小さい村道の橋に木の根や土石流が詰まり、水が方々に流れ出てしまうのに対処するために外にいた 3 名が死亡。鹿塩川の水が橋を越す。午後に電話・電気が使えなくなる。語り部は山手の実家に避難し何もできなかった。 28 日、朝から手当たり次第に生活必需品を買い集める。午後から降り出した雨により川が決壊、地響きとともに流木や 1~2m もの大石が川の上を舞うように流れていた。村の決死隊が救助を求めて山越えを開始、5~6 日後に自衛隊のヘリコプターが来た。 29 日、雨が止み曇り空の中、大西山がドーンと落ち田圃が全部つぶれ人も家畜も息たえだえに流された。 (教訓) ・災害時の広域的な協力体制 ・災害を起こさない、災害から逃れる工夫と努力を怠らない ・自然の法則と生活の知恵を大切に自然を無視した開発をしない</p> <p>○斜面を転がってきた巨石(大鹿村^{おおかわら}大河原)【No.113】 36 災害の時にマサが洗われて花崗岩の巨石が斜面を転がってきた。</p> <p>○川路村からの移籍記念碑(飯田市^{ときまた}時又)【No.120】 「時又」の川路村からの移籍記念碑で、水害により川路から時又に移籍した人々の氏名が記されている。</p> <p>○三六災害最高水位標(飯田市^{かわじ}川路)【No.123】 天竜川総合学習館 かわらんべの前の河原にある。</p>  <p>斜面を転がってきた巨石【No.113】</p>  <p>川路村からの移籍記念碑【No.120】</p>  <p>三六災害最高水位標【No.123】</p>

※事例数：参考資料-2 現存する教訓・伝承事例一覧に整理した事例を分類ごとに計上

表 3 伝承内容の概要(3/7)

伝承内容の分類	事例数※ (n=199)	伝承内容の概要	主な事例(番号は参考資料-2に対応)
○信仰	16	<p>■神社、祠、水神碑を祀って、信仰により災害から身を守るもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間の力が到底及ばない自然現象に立ち向かうため、信仰を持ち、災害から身を守るエピソードを示すもの ・人間が犠牲を払う(人々が痛みを分かち合う)人柱を行ったことを示したもの 	<p>○大宮諏訪神社への祈願と式年祭(飯田市東野)^{ひがしの}【No.129】 正徳五年(1715)未満水の時、人々が大宮の丘陵に逃げ集まり、大宮神社に加護を祈願した。すると水勢が一変し、北は野底川に南は松川へと流れが二分されて飯田城市は災害を免れたいう。以後、風水害鎮護の神として崇められていた。 正徳五年(1715)未満水の時、大宮諏訪神社高台に逃げた人々が一心に祈願をこめたところ、水勢が一変して飯田台地が大難を免れた故、飯田全町の喜びは限りなく報徳が敬神となり、全町あげての大祝祭を行うのが慣例となった。七年目干支の申年と寅年の四月一日から二夜にわたり三日間行われる。</p> <p>○諏訪宮のなぎがま(飯田市上村上町)^{かみむらかみまち}【No.153】 諏訪宮(大洪水で流れ宮にあった諏訪明神が流れ着いたところ)にはなぎがまが二本祀っており、上町付近では御射山の祭りをするようになった。水害にあったときには、祢宜様がなぎがまを持って川に行き、川すじをひくとその通りになった。古瀬良男氏と古瀬右京氏が若い頃に一度やった時、ちいとは川すじが変わった。 本来諏訪信仰の中で風切りの薙い鎌として用いられたものが、天竜川流域では洪水の瀬を切る道具として用いられた。</p> <p>○人柱(南信濃天竜川)【No.177】 昔、南信濃の天竜川に長い橋が架かっていた。毎年毎年大水で流されてしまうので、村中の人が集まって対策を話し合っていた。ひとりの男が人柱の話をしたところ、その男は最初に言い出したという理由で人柱にされてしまった。男の息子は悲しがり、父は矢作の人柱 キジも鳴かずば撃たれまい、と詠んだ紙を父が埋められている柱に貼り付けた。村の人たちのためにはなったが、父が余計なことを喋ったためにこんなめに遭わねばならなかったと悔やんでいる息子の姿をみて村人は、橋を渡る際に息子の歌を思い出し、死んだ男のおかげで安心して渡れることをありがたがったという。</p>
○ことわざ	12	<p>■自然観察や経験に基づく知恵を伝えるもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・災害や自然現象に関して、主に口頭で伝承されるべく生まれた、簡潔な言葉でまとめたもの 	<p>○煙突の煙が立てば雨、北へなびいても雨(辰野町)【No.15】 ○煙が直に立てば、天気良し(清内路村)【No.158】 上記のように辰野町(上伊那)と清内路村(下伊那)に伝わることわざには、「煙が立つ」という同じ前提条件から相反する事象が伝えられている。ことわざは、伝承された地域においてだけ通用すると考えられる事例があることに留意する必要がある。</p>

※事例数：参考資料-2 現存する教訓・伝承事例一覧に整理した事例を分類ごとに計上

表 3 伝承内容の概要(4/7)



伝承内容の分類	事例数※ (n=199)	伝承内容の概要	主な事例(番号は参考資料-2に対応)
○文芸・民謡・詩	4	<p>■文芸作品などの題材として災害をとりあげたもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・災害を題材として作品化したもの 	<p>○地山おしだす 犬石ほえる。ないてにげるは、子つれ石(伊那市高遠町藤澤(御堂垣外))【No.48】</p> <p>○正徳五年当時の歌(飯田市上郷別府)^{かみさとべつぶ}【No.133】 千早振る神代も聞かず野底山天王原に水上がるとは。</p>
○民話・伝説・昔話	99	<p>■既往災害を想起させるもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・川や池・淵に住む「主」の行動に伴う大雨・雷の発生を記すもの ・洪水・土石流の原因は「主」の怒りであることを記すもの <p>寺を壊して流れ下る土石流の様子を表現していると考えられる。</p> <p>○「民話・伝説・昔話」は、話の内容より、①洪水:47事例 ②土砂(山崩れ/土石流):20事例 ③地震:3事例 ④その他天変地異(暴風・風雨・火災・雪害等)に関連するもの:29事例 に細分化される。</p>	<p>○大蛇が池(天龍村長島)【No.170】 大蛇が棲む池があったが地震で崩れた。大蛇は和知野川を下って天竜川に出、千木沢川をさかのぼって深見ノ池をつくり移り棲んだという。</p> <p>○夢枕に立つくらがり沢の大蛇(箕輪町三日町)【No.29】 澄心寺の黙仙和尚の夢枕に妙齢の美女に化身したくらがり沢の大蛇が立ち、天に昇るために山から天竜川へ移動し千年住まなければならぬと言った。大蛇は、澄心寺や下の田畑村人には決して被害を与えないと誓い、沢をくだって通させてくれと一生のお願いをして帰った。夢からさめた和尚は、くらがり沢の入り口に石を伏せ読経を唱えて大蛇を封じ込めた。その1週間後、大蛇は荒れ狂って南沢へ抜け出したので、澄心寺は壁をぶち抜かれ、三百六十畳の畳の上に五尺から九尺の甘酒のような泥がなだれ込み、下に続く田畑も大きな被害を受けた。</p> <p>○蛇石(辰野町横川)【No.20】 昔千淵には、五十間を越えるほどのたいへん気のやさしい主の大蛇が子供と一緒に棲んでいた。その頃、大滝沢に棲んでいた二匹の兄弟竜が、ときどき暴れては大嵐を呼びおこして大水を出し、村人を苦しめていた。兄弟竜は獲物のイノシシをめぐって大ゲンカをはじめたので、大嵐となった。木が倒れ、山が崩れ、大水が出て土や石や倒れた木々がゴロゴロと横川川を流れていった。千淵に棲む大蛇は川下の人間たちを思い、子供の竜に淵の底にいるよう声をかけてから上流へと向かった。ひときわ川幅の狭まった辺りまで来ると、倒れた木々に堰き止められて小さいダムが出来ていた。大蛇は頭をもたげて出来たばかりの木や石の土手を崩しはじめたが、次々に木や石が流れてくるので苦しい水との闘いとなった。大蛇の子は帰って来ない母を心配し、傷をおいながら頭をもたげ続けている母蛇を見つけた。大蛇とその子供は長い間水と闘っていたが、嵐が静まる頃、とうとう力つきて川底に半分埋まり、寄り添うように息をひきとってしまった。熊野権現様は兄弟竜のいたずらを大変怒り、竜たちを大滝沢にある大滝に閉じ込めてしまった。村人たちは命をすててまで助けてくれた大蛇たちを大層あわれがり、いつまでもその美しい心が残るようにと、石の姿に変えたという。こうして、大小二筋の蛇石が横川川の川底にでき、いつまでも村人を守ってくれることになったという。</p>



蛇石【No.20】

※事例数：参考資料-2 現存する教訓・伝承事例一覧に整理した事例を分類ごとに計上

表 3 伝承内容の概要(5/7)

伝承内容の分類	事例数※ (n=199)	伝承内容の概要	主な事例(番号は参考資料-2に対応)
○民話・伝説・昔話	99	<p>■既往災害を想起させるもの(つづき)</p> <p>・「主」を弔い、祀ることで怒り(災害)を鎮めたことを記すもの</p> <div data-bbox="795 1087 1249 1331" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>常泉寺、山伏、祈禱、手植えの松のお話と、天竜川が一望できる「石神の松」の現地を合わせて水難や水害からのご加護を表現していると考えられる。</p> </div> <p>○「民話・伝説・昔話」は、話の内容より、①洪水:47事例 ②土砂(山崩れ/土石流):20事例 ③地震:3事例 ④その他天変地異(暴風・風雨・火災・雪害等)に関連するもの:29事例 に細分化される。</p>	<p>○福島<small>のおくさ</small>の九頭竜碑(伊那市福島)【No.41】</p> <p>堤防裏肩に設置されている九頭龍神である。九頭竜の神は長野市の戸隠神社の中心的なご神体で、明治前後に神仏の信仰が盛んになるにおよび、戸隠神社も寺格から神社に変わり、伊那谷にあっても水難除けの神として広く信仰されるようになった。</p>  <p style="text-align: center;">福島<small>のおくさ</small>の九頭竜碑【No.41】</p> <p>○石神<small>のおくさ</small>の松(中川村大草)【No.79】</p> <p>昔、釜ヶ淵に天竜の主である九頭竜(大蛇)の化身といわれる大きな鯉が住んでいた。ある年の洪水で、淵の外に跳りでて渴いて死んでしまった。里人が屍骸を今の石神の地に厚く葬り、塚を築いて水神として祀った。</p> <p>この石神を息をしないで七回りすると青坊主が現れてくるのが見えるという。</p> <p>元和(1615～)の頃、天竜川の氾濫に相次いで悩んでいた農民が、常泉寺に寄寓し法力を持っていた山伏に頼って水難除の祈禱をしてもらった。山伏は21日間祈願を続け、満願の日に精魂尽きて倒れた。そして死に先立ちこの水神に手植の松を手向けたという。山伏の遺骸は、約5・60m離れた北東の段丘上に葬り、祠を立てて行者さまとあがめた。(山伏塚)</p> <p>昔、石神坂を上下するものは皆石上の松に小石を手向けて足の疲れを癒したという。</p>  <p style="text-align: center;">石神<small>のおくさ</small>の松【No.79】</p> <p>○大蛇<small>ひがしじょう</small>になった母(阿南町東条)【No.167】</p> <p>天正十五年(1587)吉田城の下条氏が没落した。その知らせを聞いた下条康氏の母は城を抜け出し、深見の百姓家に隠れていた。間もなく訴人があって身が危なくなったので、母は井戸へ身を投げた。すると井戸が一夜に崩れて大きな池になった。大蛇の姿になった池の主は世を呪って村中の田畑を荒しまわったので、百姓たちは祠を建てて死者の霊を慰めた。この池ができてから近くの寺では、鐘をつくると大蛇が暴れ出すからと言って、鐘を漬く事を止めたという。</p>

※事例数：参考資料-2 現存する教訓・伝承事例一覧に整理した事例を分類ごとに計上

表 3 伝承内容の概要(6/7)

伝承内容の分類	事例数※ (n=199)	伝承内容の概要	主な事例(番号は参考資料-2に対応)
○民話・伝説・昔話	99	<p>■既往災害を想起させるもの(つづき)</p> <p>・過去の災害の事実を地名に託したもの</p> <div data-bbox="774 1486 1249 1591" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>土石流で川原に土砂が流出した様子を表現してできた地名と考えられる。</p> </div> <p>○「民話・伝説・昔話」は、話の内容より、①洪水:47事例 ②土砂(山崩れ/土石流):20事例 ③地震:3事例 ④その他天変地異(暴風・風雨・火災・雪害等)に関連するもの:29事例 に細分化される。</p>	<p>○辰野のいわれ(辰野町)【No.26】</p> <p>むかしの荒神山は今より大きく、東と西の山脈までつながっていて、天竜川をせきとめ、そこに湖ができていた。その湖には竜神が住んでいて、天に昇ったり降りたりしていた。ある時の大雨で湖の水が氾濫し、荒神山の東と西を切り崩して水が流れ出し、干上がってしまった。水がなくなったので竜は天に昇ってしまい、今は野になってしまった。ここを竜神がいたということから龍野(辰野)というようになった。</p> <p>○大蛇が城(松川町元大島)【No.85】</p> <p>大蛇が城(大島城)の崖下にある天竜川の深い淵には大蛇が棲むという。雲ひとつない晴れた日の朝、淵の上より立ち昇る水気が霧の雨となって城に降りそそぐのを見る人たちは、大蛇の仕業だといって不吉の前兆でもあるように恐れていた。</p> <p>天正十年二月(1582年3月~4月)、織田信忠の大軍が火矢<small>のぶただ</small>で城を攻めた時、火の手があがると不思議にも淵の水が雨となって消されてしまった。これは大蛇の仕業だと淵に無数の矢を射込むと、淵の面に大波が狂い起き、天地晦冥の大雷雨が起こり、天竜川の水を真っ赤に染めて大蛇が淵の底深くに沈んでいった。そして城は焼かれ、落城した。今でも城跡の畑を掘りおこすと真っ黒い焼米が出てくるという。また一説に城兵が、城に向かって大蛇が吐く水煙を不吉に思い、射殺した。守護を失った城は間もなく敵に攻め落とされたともいう。</p> <p>○出砂原(高森町下市田)【No.90】</p> <p>正徳五年(1715)の未満水の時、大島山から天竜川に注いでいる大島川が満水となって土石流が発生し、大量の土砂が押し出されてきた。</p> <p>○夜川瀬(飯田市南信濃和田)【No.157】</p> <p>盛平山(森山)の西方斜面が崩壊し、圧死者5人を出した。崩壊土砂が北側の押し出し沢から流出した土砂とともに、遠山川を堰止め、「出山」(和田小学校北方の小峰)とよばれる小山をつくり、天然ダムを形成した。天然ダムは、およそ1週間後に決壊し、一夜で広い河原をつくった(現夜川瀬部落)</p>



大蛇が城【No.85】

※事例数：参考資料-2 現存する教訓・伝承事例一覧に整理した事例を分類ごとに計上

表 3 伝承内容の概要(7/7)

伝承内容の分類	事例数※ (n=199)	伝承内容の概要	主な事例(番号は参考資料-2に対応)
○民話・伝説・昔話	99	<p>■伝承の地で繰り返された災害を示すもの</p> <div data-bbox="795 520 1249 632" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>人家を壊して流れ下る土石流の様子を表現していると考えられる。</p> </div> <div data-bbox="795 1352 1249 1591" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>人家を壊して流れ下る土石流の様子を表現していると考えられる。塩嶺層(赤色風化土砂)の土石流と解釈すれば湊地区の土石流と同様と推定できる。</p> </div> <p>○「民話・伝説・昔話」は、話の内容より、①洪水:47事例 ②土砂(山崩れ/土石流):20事例 ③地震:3事例 ④その他天変地異(暴風・風雨・火災・雪害等)に関連するもの:29事例 に細分化される。</p>	<p>○諏訪市^{しがくわぼら}四賀^{あいざわ}桑原^{かわぎし}の鮎沢系図(岡谷市川岸)【No.14】</p> <p>鮎沢肥前守六代之孫鮎沢源吾・孫右衛門・姉共ニ鮎沢村ニ而誕生、姉者橋原村へ嫁ス、此時正保二丙戌五月廿三日、蛇崩レニ而家屋鋪不残押流され、右兩人漸く命をたすかり闇夜橋原村姉之方江引越、正保三丙戌八月横川村江引移る、正保二兄十才、弟八才</p> <p>鮎沢肥前守の六代の孫に当たる鮎沢源吾、孫右衛門は姉と共に鮎沢村(岡谷市川岸)において誕生した。姉は橋原村(同)へ嫁いだ。この時、正保二年五月二十三日(ユリウス暦=西暦 1645 年 6 月 7 日、グレゴリオ暦=西暦 1645 年 6 月 17 日)、蛇崩れによって家屋敷が残らず押し流された。源吾と孫右衛門の兩人はようやく命が助かり、橋原村の姉の所へ引っ越した。その後正保三年八月に横川村へ引き移った。蛇崩れにあった正保二年に兄は十才、弟は八才であった。</p> <div data-bbox="1923 747 2778 1058"> </div> <p>⇒平成 18 年 7 月豪雨時、旧鮎沢村(現岡谷市川岸)の伝承の地付近の川岸地区の志平で土石流が発生</p> <p>○しっぽのない赤いへび(岡谷市堀ノ内)【No.12】</p> <p>岡谷の西堀に住んでいたケチでふくよかなオフクというおばあさんが、二羽のつばめが軒下につくった巣を疎ましく思い落としてしまったので、二羽のつばめは悲しい声を残して諏訪湖のほうへ消えていった。数日後、二羽のつばめがオフクばあさんの家に夕顔の種を運んできた。それを植えると見事な夕顔が実った。輪切りにした夕顔の中から数え切れない程の真っ赤な小さいへびが這い出してきた。あきれたオフクばあさんは、夕顔とへびを小井川の一里塚のやぶの中に投げ捨てた。やぶの中で大きくなったへびたちのしっぽは、オフクばあさんが夕顔を輪切りにした時に切られてしまっていた。しっぽのない赤いへびの大群がまるで真っ赤に燃えた火のおびのように大行進をして、地響きとともにオフクばあさんと家をひとおしにし、塩尻峠へと消えていった。</p> <div data-bbox="1923 1451 2778 1761"> </div> <p>⇒平成 18 年 7 月豪雨時、横河川の下流の右岸の伝承の地付近の横河川上流側左岸の支川(上の原)で土石流が発生</p>

※事例数：参考資料-2 現存する教訓・伝承事例一覧に整理した事例を分類ごとに計上